

研究ノート

「新資料」にみる賀川豊彦の天皇観

村山由美

MURAYAMA Yumi

東京都世田谷区の賀川豊彦・松沢資料館のおかげで、賀川豊彦の著作はそのほとんどが整理され、閲覧可能な状態にある。著作だけでなく、記念館には彼の書簡の多くがおさめられ、蔵書もことごとく保管され、カタログが作られている。賀川豊彦を通して大正、昭和初期の日本文化史について、興味深い発見をすることがある。彼の興味と教養が非常に広範囲にわたっているので、賀川の発言の正確さ、正当性を越えて、いわば本人の意図を越えて、近代日本の文化史の意外な一断面が浮かび上がることがあるのだ。私にとっての賀川豊彦の膨大な著作の資料的価値は、「賀川豊彦像」の再構築のためというよりも、むしろ、賀川という一人の知識人の目を通して垣間みることができる近代日本の庶民の姿——貧民、労働者、女郎、宗教者の姿——にあるのではないか、近頃そう考えるようになった。

とはいえ、この研究ノートは、残念ながらそのような金脈を探りあてたという報告ではない。私は2015年4月、「賀川豊彦と天皇制」というテーマで発表をする機会をあたえられた。「天皇制とキリスト教研究会」という、関東のキリスト教系の大学から研究者が多く集まる研究会でのことである。そのための調査過程で今まで知られていない著作を見つけたので、南山宗文研の所報

に掲載させていただくことにした。

賀川の上皇制についての発言

いままで賀川の上皇制についてのまとまった発言はないとされてきた。キリスト新聞社から出版されている、『賀川豊彦著作集全24巻』をみても、上皇制についての発言はまれである。著作集の中から例をあげるならば、たとえば1930年、東京の青山会館での御大典記念、日本宗教大会の講演での発言がある。

社会とは愛の団体、共同団体を社会と云ふのだ。従って社会単位をつくらなければ真の社会は来はしない。今の産業組合は社会ではない、あれは金で作った偽社会である、神の社会とは昭和天皇が即位の折に發布されたあの美しい御言葉「共栄共存」資本家も労働階級も同じ人間だ、自分だけが懐に入れて少し不景気になったから首を齧る。それでは共存共栄とはならない。(全集24巻、386頁)

また、1940年、雑誌『雲の柱』の最終巻に掲載された「皇紀二千六百年」。

人類歴史は再大発の危機に直面している。このときに際して我々は、光栄ある紀元二千六百年を迎へた。

顧るに全能者は不思議なる摂理を日本に

傾け、皇統連綿御仁慈の限りを尽して、民を愛し給ふた世界に比類なき統治者を日本に与へ給うた。…… 欧米に愛と正義が亡びるとき、我々は日本の国より世界救済の手を延して、人類社会再建の福音を述べ伝えるべきである。」(全集 24 卷 389-399 頁)

太平洋戦争の敗色が濃くなってきた頃、詩集『天空と黒土を縫い合わせて』の序文。

不義の低気圧に正義の火柱は立ち、民衆の血潮は天空に向かって竜巻のごとくたぎり立つ！ルーズベルトの国民のみが自由をもち、アジアの民族のみが奴隷にならねばならぬという不思議なる論理に太陽も嘲う……「大君のへにこそ死なめ省みはせじー」私心を打ち忘れ、生死を超越し、ただ皇国のみにつかへんとするその赤心に、暁の明星も黎明のちかきを悟りえた……大和民族の血潮は竜巻として天に達する。されば全能者よ、われらの血を持って新しい歴史を書きたまえ！(全集 20 卷、129 頁)

以上の発言をみただけでも、おおよそ賀川が天皇制に疑問を持っていないことがわかる。そして、言論弾圧のなかでやむをえず発言したのではないかという左寄りキリスト者の期待は、1945 年 10 月、読売新聞で対談として 5 日にわたって連載された、「政治の再建とデモクラシー」という対談での賀川の発言をみるときに打ちくだかれる。この対談には賀川豊彦の他、安藤正純(新日本自由党発起人)、大内兵衛(元東大経済学部教授)、矢部貞治(東大法学部教授)、船田中(元法制局長官——全国商工経済会理事長)、羽仁説子(自由学園)が参加しているが、対話をしているというよりも一人一人が思い思いのことを述べているという形式である。

賀川：私は皆でする政治が民主政治だと思う。一人で引っ張ったりするのでなく皆で

する政治、連帯意識を基礎にする政治です。今までの日本の政治は憲兵政治です。私は憲兵隊に二回、警察に一回引っ張られたが、憲兵ばかりに政治を任せてはいかんですよ。みんな怖がって日本の国家を自分のものだといふ考えを持たない、勿論天子様の国家には違いないが、それは国家主権の立場から考へることで主権だけが国家ぢゃないから。

連帯で責任を負うのがデモクラシーである、という。

国家は決して一人で出来たものぢゃない、人間で言えば脳髓ばかりで出来たものぢゃない、細胞もあり、組織もある、天子様を脳髓とすれば、脳髓だけで国家は出来たものぢゃない、足も、手も、皮膚も、肺も、心臓も、血液もいる、皆でやる政治は私は出来ると思ふ、けれども神経がなかったら困るから……そうしたらそれは機関説だといふ、機関説とは違ふ、日本の国ではその機関が天から授かった機関なんだから……しかし余り曲解ぼく考える必要はない。¹

対談の参加者の中で、「天子様」という呼称を使ったのは賀川だけである。

今回さらに注目したいのは、著作集には収録されていない、賀川豊彦・佐野學『天皇制と民主主義／日本民主革命』(清話會、1946 年 5 月 1 日発行)という冊子である。先行研究でほとんどふれられていないこの書物は、メリーランド大学に所蔵されているプランゲ文庫の一冊である。51 頁という小冊子で賀川の執筆部分は前半の 24 頁となっている。後半は戦前の日本共産党の中心人物で、獄中で転向したことでも知られる、佐野學による『日本民主革命』という小論で、各々が独立して成りたっている。賀川

1. 読売新聞 1945 年 10 月 1 日朝刊。

がどういう経緯で執筆に到ったのか、また、なぜ佐野學の論文と抱き合わせなのかといった出版の経緯は現段階では明らかにすることはできなかったが、印刷日が1946年4月20日、発行日が5月1日であるということは、日本国憲法が公布される半年前に発行されているということになる。おりしも国内の大手新聞社がしきりに天皇制について取り上げ、その存続の是非が紙面で活発に議論されていた頃のことであるため、一般の関心も高かったであろうことが推測できる。佐野學の以下の記述はその状況を反映している。

従来は天皇といふものは階級を超越し、歴史を超越する所の神の如き存在であって、日本歴史は天皇を中心にして廻轉をしてをつたという風な説明が支配してをつて、天皇制に対する批評は絶対に禁ぜられておったのであります。それがこの終戦後になつてから非常に天皇制の議論が盛んになつてきた。……(天皇は)終戦の詔勅に於いても自分の責任といふことについては話されなかつたといふやうなことがあり、色々のことで、何しろ大勢の人が自分の父親を失ひ、子どもを失ひ、又夫を失つたのでありますから、さういふ人たちの間にも自然發生的に天皇制に対する懷疑といふものが生じて参つたのであります。今日インテリが数人集まりますと天皇制の話をしますし、それから労働者、農民等の一般大衆の方は天皇制を支持するところの感情を持つてをりながらも、その感情がどうして正しいのかといふ説明を得られないのに煩悶してをるといつたやうな状態にあるわけでありませう。(括弧内引用者)²

また、賀川の記事の前に附された紹介文

2. 賀川豊彦・佐野學『天皇制と民主主義／日本民主革命』清話會、1946年、30-31頁。

には、

賀川氏の揮ふタクトによって、日本の輿論が形成され左右される現実を注視せよ。……天皇制護持か否定か、囂々沸々たる論議しかし輿論の大勢は既に決しつある然らば果たして日本的民主主義の理念と構想は？……現下緊急焦眉の大命題。

とあることから、人々がにわかに天皇制について議論をすることを許され、非常に関心が高まっていたことがうかがえる。そこで、戦前から人気の作家、活動家であり、終戦直後は東久邇内閣の首相幕僚でもあった、「事実上新日本唯一最高の指揮者」と謳われる賀川に執筆の話がきたとしても不思議ではない。なお、この書物は連合軍占領下の検閲をうけているが、検閲箇所はすべて佐野の文章中である。

「今日は天皇制の解明について意見をお聴き願ひたいと存じます。まづ民主主義と君主政體の歴史を簡単に申上げてみたいと思ひます。」という文章で始まるこの著作で賀川は、「民主主義と君主政體の歴史」を紐解くのに「ユダヤ國の創立者モーセ」にさかのぼっている。³すなわち、彼の考える最古の君主制とは、イスラエルにおける王制に他ならない。そこから、ギリシャ、ヘレニズム、そしてローマの共和制と帝政、そして、法王庁の発生、宗教改革と、前半ではキリスト教会史を中心にヨーロッパの歴史を概観しながら日本に話をもってくるという流れになっている。構成を確認しながら、議論を細かく見ていきたい。

構成は以下のようにになっている。

- ▶ 民主主義の沿革
- ▶ ローマ的民主主義
- ▶ ローマ帝国崩壊の教訓

3. 同上、1頁。

- ▶ 法王庁の発生
- ▶ 十字軍の失敗と君主制崩壊
- ▶ 近代民主主義の発生
- ▶ 近代民主主義の本質
- ▶ ジョン・カルヴィンの精神的民主主義
- ▶ フランス革命と君主制体への復帰
- ▶ 権力の循環——歴史は語る
- ▶ 独裁官スターリン
- ▶ 真の民主主義と世界連帯意識
- ▶ 日本的民主主義の在り方
- ▶ 非武装国家日本
- ▶ 政治すなわち道徳

「天皇制の解明」について、と前置きをして後、賀川は彼独自の「民主主義の歴史」を振り返る。賀川によれば、近代民主主義の発生はルターの宗教改革以降誕生した。その最初の具体例がカルヴァンによるジュネーブの宗教的共和体制である。ルターよりもカルヴァンが優れていたのは、封建諸侯と連絡したルターに対して、カルヴァンは「一種の神聖政治、即ちセオクラシー的な共和体制」⁴をとった。それがオランダ、スコットランドを經由して、アメリカの起源となったと述べている。賀川のいう、カルヴァンの「民主主義」とは、第一に民族を超越している。そして、第二に「精神的」つまり、唯物論に基づく共産主義を否定した「キリスト教の絶対的博愛主義」を基礎にした「精神的民主主義」であり、それがオランダ移民とともにアメリカにもたらされて、リンカーンによって発達したという話である。

それでは、フランス革命の思想的背景を織りなした啓蒙思想家たちはどうであったかということ、「モンテーニュの疑惑哲學、ボルテールの懐疑的文學、ジャン・ジャック・

4. 同上、10 頁。

ルソーの非宗教的な教育方針、エンサイクロペディア・スクールの唯物的科学思想」⁵は、フランスの道徳と権力を罵倒し、一旦は皇帝を排除したものの、ナポレオンという独裁官を要求して、帝政にもどることになったのであると説かれている。権力は循環する。民主制と君主制は繰り返す。そして、唯物論と「暴力の組織化」としての国家を否定する賀川は、個々人の贖罪愛、十字架の精神に根ざした「世界連帯意識」の必要性を述べる。それは、彼が戦後に推奨した「世界連邦運動」に受け継がれることとなる。

さて、これまでの議論を日本にあてはめた場合どうなるか、というのが、彼の小説の核心となるわけだが、この段階において「世界連帯意識」は早々にすがたを消しているように見える。やや唐突に、「日本人はラテン・アメリカ人に似ている」と賀川はいう。何が似ているかということ、党派心の強さであって、30 年間に首相を 5 人も暗殺した日本は、中南米の国々のように、革命をくりかえす可能性がある。それでは階級闘争、階級分裂によって国がすさんでしまう。つまり、日本では共和制はなりたちにくい。よって、「日本においても君主的形態をとった民主主義が適當である。と私はまづ第一に日本の社会心理の分析からこのやうに考えるのであります。」という、まずこれが賀川の実天皇制擁護の根拠その一である。⁶しかも、日本は非武装国家となった。「武力、暴力の組織化したものを持っていない國にとってはちょっとした暴力團がクーデターをやってもその國家は崩壊し社会制度は亂れてくる。そこで非武装国家においては黨派心を超越したる組織が要る。即ち社会連帯意識をもつてどの部族にもどの黨派にも属

5. 同上、13 頁。

6. 同上、20-21 頁。

さない超越的な存在がいる。」⁷それが天皇の存在である、というのが根拠その二である。

そして、最後に第三の根拠として、賀川は「家族国家」を挙げている。重要な部分であるので引用したい。

即ち日本帝國の生まれたのは鬭争が先であります、後にお於^マは征服によって一つの家族國家が生まれてゐる。敵を許すやうな血族的な一つの穏やかな空気が大和に生れた結果日本は誕生した。……即ち皇室の存在は道德的存在であつた。皇室が道德即政治といふ深い基準をもつてゐたから続いた。そして政治は権力の行使には違ひないが、それは必ず道德的背景を持たなければ長続きするものではない。いくら社會黨や共産黨がこの後権力を得ても、いくら貧民に同情しようとも、それが非道德的なものであつたら長続きしない。二千六百年の間日本の皇室が続いたのは道德的存在であつたからであります。そしてこの後日本に於いて必要なものはこの道德的政治の要請であります。⁸

また、1946年6月に出版された『新生活の道標』でも、政治については、君国制民主主義を唱え「万世一系の皇室が、不偏不党の立場でおられるのであるから、われわれはこの慈父のごとき君主者を中心とする」といって皇室をたてており、「…統一の表象たる天皇は組織と協力の一元化をもたらし、創造性を發揮せしむるとき、また『朕は汝らとともにあり』と天皇が言われたことは皇室が社会連帯意識に徹底していることを示す」とする。

7. 同上、21頁。

8. 同上、22-23頁。

賀川の上皇理解とその問題点

ひろたまさきは『差別から見る日本の歴史』(2008年)で、世界のいずれの国にも優越する日本の独自性を示す表象としての天皇の「万世一系」という思想の差別的理論を指摘している。すなわち、「万世一系」は天皇につらなる「日本人」の優越性の根拠となり、血統によって人間を評価し差別する論理として、血統による社会秩序を必然とすることになる。そこには賀川がいうような、「血族的」で「穏やか」な家族国家は存在しない。天皇を頂点とした「家族国家」は、新しく近代民族国家を創出し、国民を天皇の臣民として育成するためのレトリックであり、国外の植民地住民を暴力的に同化しつつ支配するという構造をつくりだし、本国からは植民地に対しては支配民族として優越感を持った入植者を送り込んだのである。その天皇を「道德的」であるとした賀川はまず、植民地住民に対する差別という天皇制イデオロギーの特徴に無頓着であった。それは彼の『民主主義と天皇制』における以下のような発言にもあらわれている。

ローマ帝國も遂に奴隸として運んできたドイツ人が内側と外側から攻め立てまして遂に崩壊いたしました。これは日本においても教訓とすべき貼でありまして、朝鮮を征服し朝鮮に統治を行ったのはよいけれども、終戦後朝鮮の方々が大部分共産黨に金を入れる。朝鮮に於いては日本人に反抗し内部においては共産黨に金を入れるといふのと似てゐるのであります。つまり天皇制破壊の運動などでも、征服國家たるローマ帝國が味つたと同じことを日本においても今日我々は味わつてゐるのであります。もしも日本が朝鮮を征服していなかったならば、終戦後日本の治安はこんなに悪くなつては

いませんでした。⁹

差別の理論は天皇制のみならず、1880年代から欧米同様に広がってゆく社会ダーウィニズム、優劣の原因を遺伝に求め、国家に役立つ人間とそうでないものを振り分ける優生学など、さまざまな民族を抱え込む「帝国」の理論として、庶民にも広がっていく。自然科学にも洞察の深かった賀川は「人種」「階層」「性」などを単位とする差別の論理に対して違和感をおぼえることなく、むしろ知識人としてそれを民衆に浸透させる役割をはたしてしまったと言うことはできないだろうか。

そして、やや乱暴な議論にはなるが、賀川の平和主義の棄却についても、天皇制と帝国のイデオロギーが彼の平和主義の根拠を駆逐していったと考えることはできないだろうか。賀川の戦後の天皇理解ということについては、賀川の戦後の世界構想である、「世界連邦運動」における「帝国の論理」をみることでその全体性が明らかになるということが予想される。

結論

賀川豊彦の天皇についての発言を、彼の差別発言、平和主義の限界とあわせてみると、被差別部落についての発言は天皇を頂点とした国体に表された民族意識のあらわれとして捉えることができ、また、戦争協力についても、天皇制という包括的観念のなかで賀川の中では自己矛盾無く選ばれた道だったのではないかと予測することができる。キリスト教と天皇制の関わりを考えるときに、プロテスタンティズムの導入が、近代天皇制が非常な権力と速度とで形成されようとしているただ中でのできごと

9. 同上、5頁。

であり、近代天皇制と歩みをともにしたということ念頭に置くことは重要である。民衆の危機意識を苗床にして、近代天皇制という包括的なイデオロギーは固有のコスモロジーを提示し、人びとの生活の隅々に浸透した。こうした意味で、近代日本キリスト教精神史を形づくった人びとも大筋では、天皇制という求心力に絡めとられていったといえるのだろう。

参考文献

- 賀川豊彦全集刊行会編『賀川豊彦全集第1巻～24巻』（キリスト新聞社、1962年）
- 雨宮英一『青春の賀川豊彦』（新教出版、2003年）
- 雨宮英一『貧しい人びとと賀川豊彦』（新教出版、2005年）
- 雨宮英一『暗い谷間の賀川豊彦』（新教出版、2006年）
- 河島幸夫『賀川豊彦の生涯と思想』（中川書店、1992年）
- 河島幸夫『賀川豊彦と太平洋戦争—戦争・平和・罪責告白』（中川書店、1991年）
- 工藤英一『社会運動とキリスト教—天皇制・部落差別・鉋毒との戦い』（日本YMCA同盟出版部、1972年）
- 倉橋克人『『大正デモクラシー』と賀川豊彦—天皇制意識との関連で』富坂キリスト教センター編『大正デモクラシー・天皇制・キリスト教』（新教出版、2001年）
- 倉橋克人「賀川豊彦についての先行研究」『日本基督教史における賀川豊彦』（新教出版、2011年）
- 佐治孝典「賀川における戦争と平和」『土着と挫折—近代日本キリスト教史の一断面』（新教出版、1991年）
- 佐治孝典「賀川豊彦のアジア民衆観」『土着と挫折—近代日本キリスト教史の一断面』

(新教出版、1991年)

佐治孝典「賀川豊彦の天皇観」『土着と挫折——近代日本キリスト教史の一断面』(新教出版、1991年)

鈴木正幸『近代天皇制の支配秩序』(校倉書房、1986年)

隅谷三喜男『賀川豊彦』(日本基督教団出版局、1966年)

土肥昭夫『天皇とキリスト——近現代天皇制とキリスト教の教会史的考察』(新教出版、

2012年)

ひろたまさき『差別からみる日本の歴史』(東京、解放出版社、2008年)

村上重良『国家神道』(岩波新書、1970年)

安丸良夫『近代天皇像の形成』(岩波書店、1992年)

T. フジタニ『天皇のパージェント』(NHKブックス、1994年)

むらやま・ゆみ
南山宗教文化研究所客員研究所員